
デビルズ(前・後編)

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビルズ（前・後編）

【Nコード】

N2971U

【作者名】

淡雪ぼたん

【あらすじ】

『カクテル・バー』シリーズ第3弾”デビルズ（カクテルの名前からイメージを膨らませて書いた小説です） / 好きになった彼女には「悪魔のような女」だと悪い噂が…。そんな事信じない…だけどもある日俺は見てしまった。《フォレストにて発表した作品を手直しして掲載してます》

前編

今宵のカクテルのお話しは『デビルズ』。

名前の由来は、カクテルの赤い鮮やかな色が血の色を連想させ、悪魔の名前がついたのかと．．．。

レシピは．．．。

- ・ポートワイン 1/2
- ・ベルモット・エクストラドライ 1/2
- ・レモンジュース 2 dash

これをシェイクしてカクテルグラスにどうぞ．．．。

* * * * *

．．．．俺は思い切って告白した．．．。

。 昼休みにいつも利用するセルフ式のカフェの従業員、ありよし しんじゅ有吉真珠．．．

俺より2歳年下の23歳。

見た目勝ち気でちょっぴり小生意気な感じだが、笑顔がかわいくて働き者だ．．．。

ゆるいウェーブのかかった栗色の下ろせば腰までありそうなロングヘアを後ろでアップにまとめ。少し濃いめの後れ毛が色香漂う感じでそそられて、そして可愛い。

少し赤みのかかった色白、少し童顔がかった大きな瞳の二重の目が魅力的．．．全体的な雰囲気、挑発的な小悪魔風で印象的．．．。

元ヤンキーだとか、あいつはヤバイとか、そんな噂を耳にしたと、地元出身の友人からはやめておけと言われたが、何故か物凄く魅かれてしまい、この気持ちを抑えられなくなった……。

ドキドキしながら人の少ない時間を見計らってカフェに行き、思い切ってデートに誘ってみた。

そして意外にもあっさりとOKを貰って、デートにまでこぎつけた……。

友人からは、アツサリOKしたのには何か裏があるとか、無事帰ってこれるか分からないぞとか、明日、港に水死体で浮かんでるかもとか……。

散々な事を言われたが、そんな事気にしないぞ！！

俺が思うにそんな子じゃないと思うんだ……。

休日のデートの待ち合わせ場所は、駅の改札口……。

張り切って30分前からやって来て、まだ早いのに心臓をバクバク時めかせながら、回りをキョロついていた。

約束の時間15分前になると、いよいよ憧れの彼女と間もなくデートかと、喜びのカウントダウンがスタートし始め、夢見心地のようなお酒に酔ったようなほろよい気分になってくる……。

彼女のイメージ的には、約束の時間ギリギリか少し遅れるかなと想像していたが、意外にも15分前にやって来た。

アゲハ風飛んだファッションかなと思っていたが、落ち着いたコンサバ系カジュアルスタイルで驚いた……。

いつもアップの髪の毛が、今日は横の辺りで可愛らしいレースの縁

取りのシュシュで1つに結んである。
可愛い．．．可愛すぎる．．．。

「こんにちは．．．」
少し含羞みがちの微笑んだ顔がまた可愛い．．．。

「あ．．．どうもこんにちは。今日は来てくれて、どうもありがとう．．．」

「こちらこそ、誘ってくれて嬉しかったです」
カフェの営業スマイルじゃなくて、俺だけに向けられるナチュラルな笑顔が超かわいい．．．。
それに、意外にも礼儀正しくてキチンとしてるなと感じた。
何でそんな悪い噂がたってるのか？ 理解出来なかった．．．。

「あ．．．倉橋さんって、カフェ向いの高層ビルのオフィスで働いてるのですよね？」

「あ．．．名前で呼んでくれていいですよ。 向いのビルの35階の 清和商事 に努めてます」

「凄い大手ですよね。裕之さんって、頭いいんですね」
電車に乗り、並んで椅子に座って、あれこれ会話が弾む。

「いやあ、そんな事ないですよ．．．」
憧れの真珠ちゃんから『裕之さん』って呼ばれて、心臓の鼓動は益々早まる。
血圧上がりそうだ．．．。

「でも、何で私なんかに声をかけてくださったのかと、とても驚き

ました」

「そんな・・・真珠ちゃん凄くモテそうだから、きつとふられるなって覚悟してたんだけど、OK貰えてもう・・・夢のような気持ちなんだけど・・・」

「私こそ、裕之さんの事、素敵な人だなって憧れてたから・・・誘って貰えて嬉しくて・・・」

「えーっ。本当に？ 嬉しいなあ・・・」

彼女としなさき水族館に行って、東京都庭園美術館に移動、そこから恵比寿ガーデンプレイズへ、そしてユビスピール記念館・・・。

「裕之さんってセンスいいですねー」
凄く楽しそうにはしゃぐ真珠。

「い・・・いやあそんな事・・・。今日のデートコース楽しんでもらえるかどうか、内心ドキドキしてたんだ」

「凄く楽しいです」
ずっとニコニコ笑顔の真珠。

『か・・・可愛すぎるー!!』
さっきから心の中で何度もしつこく呟いているが・・・可愛いーっ!!
裕之は、内心『萌ーっ!!』って飛び上がりたいぐらいの心境だった。

実は今日のデートコース、ネットで検索して搜したオススメコース

真似ただけなんだよね．．．。
モテナイ訳じゃんだけど、恋愛経験少ない俺．．．言うのは
疎くてさ．．．。

そして．．．そして．．．。

今日のデートコースは、晩ご飯と一緒に食べて、ファイナルを迎え
ようとしていた．．．。

俺は全く想定してなかった．．．。

まさか．．．まさか．．．まさかーっ！！！！

その後に、こんな進展があるなんてっ．．．。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか？」

って俺が言った時だった．．．。

「まだ帰りたくないな．．．。」

悩まし気な上目遣いで．．．真珠から誘って来た。

嘘だろ．．．！！！！

絶対これは俺の妄想か？ 幻か？？

友人の言った、『明日の朝、港で水死体で浮かんでるかもな．．．』

『その言葉が、頭の中をグルグル巡ってるが、俺の思考回路は完
全にイカレテ麻痺してしまった。』

死んでもいいから．．．。真珠ちゃんと．．．。

* * * * *

昼間のデートの時は、愛らしくて可愛らしい真珠だったが、あの後
は妖艶で、小悪魔のような感じだ．．．。

離れたくない．．．いつまでも永遠にこうしていたい．．．。
俺達は一晩中愛しあつた．．．。

．．．．．窓のカーテンの隙間から朝日が入つて来た。

「裕之さん、そろそろ支度しないと．．．仕事におくれちゃいますよ」

そつだった、休日のデートの次の日は、平日．．．だった．．．。

「ああ．．．真珠ちゃん。離れたくない気分．．．凄く残念だな．．．
．．．もつと一緒にいたいのに．．．」

「またデートしてくれますか？」

「もう何度でも．．．毎日でも．．．」

「嬉しい．．．」

今の彼女は昼間の可愛い真珠の顔だ．．．。

俺は心の中で、おせっかいな友人に向つてつぶやいた。

『港で水死体どころか、最高のデートだったぞ！！』

混雑する電車の中では、抱きあつて．．．。真珠を人込みからガードして．．．。

駅までは、手を繋いで仲良く歩いた。

そして彼女は、カフェに．．．俺は向いのビルのオフィスに．．．手を降りながら別れた。

二人仲良く朝帰りだ．．．。

- - - 俺はまだこの時、
真珠の心の中にある深い闇を知らな
かった。。。。

(前編終了・後編に続く)

後編

「……俺は分からなかった……」

あんな可愛らしくて、キチンとしてて、非の打ち所もないような素敵な彼女なのに……。

悪く言われて、彼女と付き合うのは、やめた方が良くなんてなんでそんな事を言われるのか……。

でも、暫くしてある光景を見てしまった。

俺は仕事が終わって、会社のビルを出て、真珠ちゃんはいるかたとカフェを覗いたら居なかつたので、駅に向かって歩き始めていた。

カフェ近くのコンビニの前を通りかかった所、ふと見たら、コンビニに入ろうと入り口に向っている真珠を見つけた。

「あ……真珠ちゃんだ」

声をかけようとした時だった……。

モサツとした27、8歳ぐらいの男性がコンビニから出て来て、真珠と擦れ違った。

その時、真珠とその男は肩がぶつかって、男は買い物袋を落とした。

真珠がギロリと鬼の形相でその男を睨みつける。

男は脅えて、2、3歩下がって尻込みした。

「クズ野郎！！なにこんな所で買い物してるのよ！！」

凄みのきいた、今まで聞いた事のない低い声で怒鳴りつけた。

それから真珠はその男の落とした買い物袋をグシャグシャに踏みつぶし始めた。

「バーカー!! とつとと消えな!!」
そして男の尻を足で蹴り上げ、男はお尻を押さえながら小走りに去って行った。

「嘘だろう・・・」
まるで悪魔のような形相で、凍えそうな冷たい目をしていた。
これがあの真珠ちゃん?

仁王立ちして、その男が消えてく様子を暫く見てから、あの男の忘れていった袋をポーンとごみ箱に入れて、コンビニに入ろうと方向転換した真珠と目があった。

「裕之さん・・・」
険しい表情は一転、驚きの表情に変わった。

「し・・・真珠ちゃん・・・」

「今の、見ちゃったのですね・・・」
そして今度はとても苦しそうな、辛そうな表情に変わった・・・。

「う・・・うん」

なんて言っているのか言葉も見つからず、ただ返事をするだけの俺・・・。

「ごめんなさい。私ってこう言う人ですから・・・こんな姿見られちゃって・・・もう終わりですよね。」

この間ありがとう・・・とても楽しかったです」
ふと悲し気な、儂げな表情の後、気を取り直したみたいに気丈に真直ぐ俺を見て、真珠が言った。
そして走り去って行った・・・。

「なんだよ．．．それ．．．」
それは突然の別れの言葉の様だった．．．。
何がなんだか分からないで、暫くその場所に立ちつくしていた。

* * * * *

「なあ、やっぱり俺の言った通りだったたる．．．」
同じ社の同僚であり、友人でもある地元出身の柴崎に、コンビニで荒れている彼女の話しと、別れを切り出された事を話したら、ほれ言わんこつちやないとため息混じりに言った。

「でもさあ．．．荒れていたのは何か訳があるんじゃないかって感じもするんだよね．．．」

奴の言う事も一理ある気はするけれど、何か納得いかない部分がある。

「もう関わらない方が良く俺は思うけどね．．．」
俺さあ、ジモピー（地元人）じゃん、彼女とは同じ学校出身で、俺は先輩に当たるんだけどさ、後輩から彼女に関する悪い話を色々聞いてたからさ．．．」

「例えば？」

「この辺一帯を取り仕切っていた、レッドスコピオン（チーマーグループ）の男達の女だったとか．．．」

「なんだそれ？」

「言ってみれば、その男達の慰み物にされてたって事だよ」

「ええっ」

「あいつはかなり薄汚れてるぜ」

あんなに礼儀正しくて可愛らしい彼女が?!
物凄くショックだった...

「そう言えばさ...。27、8歳ぐらいのモサーツとした感じの
奴と、彼女って何か関係があるのかな？」

ふとあのコンビニの所で揉めていた、あの男性の事が気になって、
柴崎に聞いて見た。

「ああ...。それってさ、彼女の義理のアニキじゃない？」

「それもっと詳しく教えてよ...」
俺は身を乗り出した。

「あまり詳しい事は分からないんだけどさ、彼女は一卵性の双子で
さ、確か姉の名前は珊瑚さくろって言うてたな...。
両親が離婚して、珊瑚は父親が引き取って、真珠は母親に引き取ら
れて、一家離散の様になってさ、真珠は母親と一緒に、この町に越
して来たんだ。

真珠が小学校6年の頃だったと思う...。

その離婚の原因が母親の浮気でさ...。
離婚後母親は浮気相手の男性と再婚して...。
その男性の連れ子が、4歳年上の、あの義理のアニキの孝司たかしでさ、
俺の2つ上の先輩だった...。

あいつ結構悪でさ、チーマーの一員だったんだ。

まあ元々は気の弱い所もあったからさ、チーマーに居たけどパシリ（小間使い）っぱかったみたい……。

で、真珠ってあの器量だろ？

義理のアニキに性的虐待受けてたみたい……。

それからチーマーに回されて……慰み物にされて……。

中学にはいるとメチャクチャ荒れちゃってさ……。

喧嘩も結構強くなつてさ……だんだんチーマーのリーダー格に上がっていつてさ……。

逆にアニキがボコされて……ついにはアニキが引きこもりになっちゃって……。

よっぽど恨みが溜まっていたんだろうね……。

そうそう……。

真珠の姉さんって、時々真珠に会いに、この町にきてたみたいで俺も見かけたことあるけれど、同じ顔してるけど清楚でお嬢様ぽくて全然タイプが違ってたよ。

だけどさ、アニキがあんな感じでさ、何かあったみたいで自殺して亡くなつたらしい……。

そう考えると真珠って結構可愛そうな所があるけれど……。

あまり関わり持たないほうが良いと思うよ。彼女はヤバイよ……。

俺は驚愕した……。

なんて悲惨で可愛そうな生い立ちなんだ……。

あのコンビニでの事は、あの男に非がありすぎる……。

傍げで淋しげな真珠の顔が浮かんできた……。

そんな事がなかったら、彼女のお姉さんのように清楚で可憐で可愛らしい子だったはずだ……。それに俺に見せたあの姿が、きつと本来の彼女の姿だった。。

チーマーに回された事は彼女の望んだ事じゃないし、被害者じゃないか……。中学時代に荒れたのは、自分の身を守る為に一生懸命強くなるってしたんじゃないか？

仕事が終わったら、俺はすぐに社を退社し、カフェに走って行った。店には居なくて、お店の人に聞いたら、カフェは辞めたそうで、先程、皆に挨拶とクリーニングした制服の返却にやって来て、駅の方に歩いていったと言った。

俺は猛スピードで駅に向った。

辺りを見回したら、下り線ホームに彼女が立っている姿が見えた。

「真珠ちゃん!!」

「裕之さん」

物凄く驚いた表情の真珠。

「何処に行くんだよ？ またデートするって約束したじゃないか！俺別れないよ」

「だって、私汚れてるし、あなたに相応しくありませんよ」

「そんな事ないよ。大体の話しは聞いたけど、そんな事俺は気にしないよ」

その時だった．．．。

すぐ近くで子連れの主婦同士ベチャクチャお喋りに花が咲いていたが、突然悲鳴を上げた。

「キヤーツ！！　うちの勇太が．．．」

「え？」

と思った瞬間、真珠が線路に飛び込んだ。

何がなんだか分からない状況の所に、電車が物凄いブレーキ音を上げて目の前を過っていった。

俺は『うおおおおお』と獣のような悲鳴を上げていたように思う。

「真珠ーっ！！！！」

後でやっと状況をのみ込めた。

主婦が話して夢中になっている間に、3歳児の子供がチヨロチヨロしながらホームに転落、それを知った真珠が助けようとしてホームに飛び込んだのだった．．．。

俺は崩れるようにホームに両手をついて、泣き崩れた。

駅構内に人身事故のアナウンスが何度も流れ、駅員が数名ホームに降りて、車両の下を覗き込んだりしていた。

やがて、担架が運ばれて来て、電車がゆっくりと動き始めた。

電車が通り過ぎた後に、青ざめた顔はしていたが、真珠が男の子を

抱きしめて、凜と立っている姿が見えた。

「真珠ーっ！ー！！」

俺は叫んだ。

「裕之さん．．．」

腕には擦れたような傷があり、血が出ていたが大げがはしてない様子だった。

男の子と真珠は救急車で病院に運ばれ、俺は付き添った。

男の子の母親は、何度も何度も真珠にお礼を言った。

男の子は線路に転落した時に頭を切って数針縫う怪我だった。

真珠は男の子を掴むと転がりながらすぐ側の退避口に身を埋め、その直後に電車が滑り込んできたそうだった。

まさに間一髪だったわけだ．．．。

俺は真珠にしがみつき大泣きした。

無事で良かった、生きていてくれて嬉しい、ありがとうとか、延々と言っていたみたいだ。

気が動転してパニックっていてあまり覚えてない。

真珠は擦り傷だけで、大きな怪我もなくすんだが、一応一晩入院しなさいと言われ、ベッドの上だ。

俺は一晩付きそう事にした。

丁度空いている部屋が個室だったので、一晩中真珠とお喋りした。

真珠は本当は真珠じゃなかった．．．。

お父さんに引き取られた姉の珊瑚だったのだ．．．。

妹真珠が義理の兄から性的虐待を受けて、チームにも回されている事実を中学に上がった時に知って、真珠を守る為に入れ替わったそう
だ。

真珠と入れ替わる前に、卑怯な義兄から、俺の言う事を聞けば真珠には手は出さないとわれ、言いなりになってたつた1度だけ自分の身を捧げたが、その後も真珠への虐待は続き、真つ赤な嘘だった事が後で分かる。

言葉では言い尽くせないほど、辛かった事だろう・・・。

一見清楚でお上品な様に見える珊瑚だが、昔から喧嘩っ早くて、ちよつと気弱な真珠をいつも守ってきたそうで、父親にとても懐いていた珊瑚は、格闘好きな父親が習っている道場によく付いて行って、護身術など色々習ったりしていたそうで、武道のたしなみがあるそう
だ。

真珠と入れ替わった途端に本領発揮で、あつという間にチームのリーダーから一目置かれるぐらいになって、卑怯な義理の兄に復讐し始め、義兄は引きこもりになる。

入れ替わった後、父の元でだんだん元気を取り戻すかの様に思えた真珠だったが、チームに回された屈辱的な出来事をどうしても忘れる事が出来ずにとつとつ死を選んでしまったそう
だ。

真珠が亡くなってしまって、珊瑚は父の元に戻ったが、最近義兄が少しづつ外出出来るようになり、チョロチョロうろつき始めた事を知って、どうしても許せなかつた珊瑚はまたここに舞い戻ってきてカフェに勤めるようになり、義兄を威嚇し、復讐を続けていたそう
だ。

それが俺が見たあの光景だった・・・。

「じゃあ、本当は珊瑚ちゃんなんだね」

「真珠のふりをして、ごめんなさい・・・」

「真珠ちゃんでも、珊瑚ちゃんでも、名前なんてどっちでも構わないよ。」

俺は君自身に魅かれて好きになっただから・・・」

「カフェに勤め始めて、良くお店に来てくださる裕之さんの事が好きになって、いつも心を時めかせてました。」

だから誘ってくださった時に凄く嬉しかった・・・。
多分、いつか悪い噂を耳にするだろう・・・そして去って行ってしまっただろうと思って・・・あなたと過ごした幸せの時間を中心に残しておきたくて、初めてのデートであなを誘惑するような事をしてしまいました。」

「俺だつて同じように魅かれてたから、デートに誘ってOKしてくれた時に凄く嬉しかったんだ。」

俺は昔の事は全然気にしないし、珊瑚ちゃんは汚れてなんかいないし・・・。別れるなんて言わないで欲しい。」

「こんな私でいいのですか？」

「そのままの君がいいんだ」

「嬉しい・・・」

「またデートするって約束したでしょ？ しよっ・・・デート」

「私、全てを忘れて、父の元に帰ろうと思ってました。でも、そんな嬉しい事を言われてしまったら、裕之さんと離れられない・・・」

「これからも俺と付き合って欲しいな」

「本当に良いのですか？」

「うん。なんにも問題ないよ!」

「嬉しい・・・ありがとう」

真珠・・・いや、珊瑚は頬を染めて嬉しそうな表情をして、涙ぐんだ。

その後俺達は、深い愛情と絆で結ばれ、時には喧嘩して、すぐに仲直りして・・・。

一緒に笑って、一緒に感動して、一緒に喜んで・・・。とつてもいい関係が続いている。

近い将来、結婚も考えてる・・・。

俺は思った・・・。

小悪魔のような彼女だけど、本当はとても優しく勇気のある素敵な天使なんだと言う事を・・・。

(・・・完・・・)

後編（後書き）

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。 (^ ^)
(^ ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971u/>

デビルズ(前・後編)

2011年7月1日13時03分発行